

# 妾宅

永井荷風

青空文庫



どうしても心から満足して世間一般の趨勢ともなに伴って行くことが出来ないと知ったその日から、彼はとある堀割のほとりなる妾しやう宅たくにのみ、一人倦うみがちなる空想の日を送る事が多くなつた。

今の世の中には面白い事がなくなつたというばかりならまだしも  
の事、見たくでもない物の限りを見せつけられるのに堪たえられな  
くなつたからである。進んでそれらのものを打壊そうとするより  
もむしろ退しりぞいて隠れるに如しくはないと思つたからである。何も彼か  
も時世時節ときよじせつならば是非もないというような川柳せんりゆうしき式しきのあきらめ

が、遺伝的に彼の精神を訓練さしていたからである。身過ぎ世過みすよすぎならば洋服も着よう。生れ落ちてから畳の上に両足を折曲おりまげて育ねじつた揉ねじれた身体からだにも、当節の流行とあれば、直立した国の人たちの着る洋服も臆おくめん面なく採用しよう。用があれば停電しがちの電車にも乗ろう。自動車にも乗ろう。園遊会にも行なこう。浪花ななわぶ節しも聞きこう。女優の鞆ぶらんこ鞆もも下からのぞこう。沙翁劇さおうげきも見よう。洋楽入りの長ながうた唄うたも聞きこう。頼まれれば小説も書かこう。粗悪そこつな紙に誤植だらけの印刷も結構至極と喜よろこぼう。それに対する粗そこつ忽せんぼん千萬せんぼんなジウルナリズムの批評も聞きこう。同業者の誼よしみにあんまり黙もくつていても悪いようなら議論のお相手もしよう。けれども要するに、それはみんな身過ぎ世過ぎである。川竹の憂うれき身をか

こつ哥うたぎわ沢さわの糸より細き筆の命いのちげ毛げを渡世とせいにする是非せひなさ……才さいツト大變忘れたり。彼というは堂々たる現代文士の一人いちにん、但し人の知らない別号を珍々先生という半可通はんかつうである。かくして先生は現代の生存競争に負けないため、現代の人たちのする事は善悪無差別に一通りは心得ていようと努めた。その代り、そうするには何処か人知れぬ心の隠家かくれがを求めて、時々生命いのちの洗濯をする必要を感じた。宿やどなしの乞食こくじきでさえも眠るにはなお橋の下を求めるではないか。厭いやな客きやく衆しゆの勤めには傾城けいせいをして引過ひけすぎの情ま夫ぶを許してやらねばならぬ。先生は現代生活の仮面をなるべく巧たくみに被かぶりおおせるためには、人知れずそれをぬぎ捨てべき楽屋がくやを必要としたのである。昔より大隠たいいんのかくれる町中まちなかの裏通り、堀

割に沿う日かげの妾宅は即ちこの目的のために作られた彼が心の安息所であつたのだ。

## 二

妾宅は上り框の二畳を入れて僅か四間ほどしかない古びた借家であるが、拭込んだ表の格子戸と家内の障子と唐紙とは、今の職人の請負仕事を嫌い、先頃まだ吉原の焼けない時分、廃業する芸者家の古建具をそのまま買い取つたものである。二階の一間の欄干だけには日が当るけれど、下座敷は茶の間も共に、外から這入ると人の顔さえちよつとは見分かぬほどの薄暗

さ。廁かわやへ出る縁えん先の小庭に至つては、日の目を見ぬ地面の湿しけ切つてゐること気味わるいばかりである。しかし先生はこの薄暗く湿しめつた家をば、それがためにかえつてなつかしく、如何にも浮世に遠く失敗した人の隠家らしい心持ちをさせる事を喜んでゐる。

石せき 菖しょうの水鉢みづばちを置いた櫺れん子窓じまどの下には朱あかの溜塗ためぬりの鏡台がある。芸者が弘ひろめをする時の手拭てぬぐいの包紙つつみで腰張こしした壁の上には鬱金うこんの包つつみみを着た三味線さんまいせんが二挺にちようかけてある。大きな如輪じよりんの長火ながひば鉢ちの傍そばにはきまつて猫が寝ふすまている。襖ふすまを越した次の座敷には薄暗い上にも更に薄暗い床とこの間に、極彩色ごくさいしきの豊国とよくにの女姿めづかが、石せ州しゅう流りゅうの生花いけばなのかけから、過ぎた時代の風俗ふうぞくを見せてゐる。片隅かたぐしには「命いのち」という字を傘かさの形かたちのように繫つないだ赤い友禅ゆうぜんの蒲ふ

団どんをかけた置炬燵おきごたつ。その後には二枚折の屏風びょうぶに、今は大方おおかた故人となつた役者や芸人の改名披露やおさらいの摺物すりものを張つた中に、田之助半四郎たのすけはんしろうなどの死絵しにえ二、三枚をも交まぜてある。彼が殊こととさら更さらに、この薄暗い妾宅をなつかしく思うのは、風鈴ふうりんの音涼ねしき夏の夕ゆうべよりも、虫の音冴ねさゆる夜長よりも、かえつて底冷そこびえのする曇くもつた冬の日の、どうやら雪にでもなりそうな暮くれ方がた近く、この一間ひとまの置炬燵に猫を膝ひざにしながら、所在しよざいなげに生欠なまあくび伸のびをかみしめる時であるのだ。彼は窓外まどそとを呼び過ぎる物売りの声と、遠い大通りに轟ととき渡る車の響なごみと、廁せうの向うの腐くさりかけた建仁寺けんんにんじが垣きを越こして、隣うちりの家から聞きえ出すはたきの音をば何なにというわけもなく悲しく聞ききなす。お妾めかけはいつでもこの時分には銭湯に行



つた留守のこと、彼は一人燈火あかりのない座敷の置炬燵ひじまくらに 肱ひじ 枕まくらし  
て、折々は隙漏すきもる寒い川風に身顫みふるいをするのである。珍々先生は  
こんな処ところにこうしていじけていずとも、便利な今の世の中にはも  
っと暖かな、もっと明あかるい賑にぎやかな場所ばしょがいくらかもある事を能く承知  
している。けれどもそういう明あかるい晴はやかな場所へ意気揚々と出し  
やばるのは、自分なぞが先に立つてやらずとも、成功主義の物欲  
しい世の中には、そういう処へ出しやばって齒の浮くような事を  
いいたがる連中が、あり余って困るほどある事を思返すと、先生  
はむしろ薄寒い妾宅の置炬燵にかじりついているのが、涙の出る  
ほど嬉しく淋しく悲しく同時にまた何ともいえぬほど皮肉な得意  
を感じるのであった。表の河岸かしのり通には日暮と共に吹起かる空からツ風かぜ

の音が聞え出すと、妾宅の障子はどれが動くとも知れず、ガタリガタリと妙に氣力の抜けた陰気な音を響かす。その度々に寒さはぞくぞく襟えりもと元へ浸しみ入る。勝手の方では、いつも居眠りしている下女が、またしても皿小鉢を破こわしたらしい物音がする。炭団たどんはどうやらもう灰になってしまったらしい。先生はこういう時、つくづくこれが先祖代々日本人の送り過越すごして来た日本の家の冬の心持だと感ずるのである。宝井其角たからいきかくの家にもこれと同じような冬の日が幾度いくたびとなく来たのであろう。喜多川歌磨きたがわうたまろの絵筆持つ指先もかかる寒さのために凍こおったのであろう。馬琴北斎ばきんほくさいもこの置炬燵の火の消えかかった果敢はかなさを知っていたであらう。京きょうでんでん 伝でん 一九 春しゅん 水すい 種たね 彦ひこ 彦彦を始めて、魯文默阿弥ろぶんもくあみに至るまで、

少くとも日本文化の過去の誇りを残した人々は、皆おのれと同じ  
 ようなこの日本の家の寒さを知っていたのだ。しかして彼らはこ  
 の寒さと薄暗さにも恨むことなく反抗することなく、手錠をはめ  
 られはんぎ板木を取とりこわ壊すお上の御成敗かみを甘受ごせいばいしていたのだと思うと、  
 時代の思想はいつになっても、昔に代らぬ今の世の中、先生は形  
 ばかり西洋模倣の倶楽部クラブやカフェーだんろの媛炉だんろのほとりに葉巻をくゆ  
 らし、新時代の人々と舶来の火ウイスキー酒を傾けつつ、恐れ多くも天  
 下の御政事を云々うんぬんしたとて何になろう。われわれ日本の芸術家  
 の先天的に定められた運命は、やはりこうした置炬燵の肱枕より  
 外ほかにはないというような心持になるのであった。

## 三

人種の発達と共にその国土の底に深くも根ざした思想の濫<sup>らんしよ</sup>  
觴<sup>う</sup>を鑑<sup>かん</sup>み、幾時代の遺传的修養を経たる忍従棄権の悟<sup>さと</sup>りに、わ  
れ知らず襟<sup>えり</sup>を正す折<sup>おり</sup>しもあれ。先生は時々かかる暮れがた近く、  
隣<sup>うち</sup>の家から子供のさらう稽古の三味線が、かえつて午飯<sup>ひるめし</sup>過ぎの  
真昼よりも一層賑<sup>にぎや</sup>かに聞え出すのに、眠るともなく覚めるともな  
く、疲れきつた淋しい心をゆすぶらせる。家<sup>うち</sup>の中はもう真暗にな  
っているが、戸外<sup>おもて</sup>にはまだ斜<sup>な</sup>にうつろう冬の夕日が残っているに  
違いない。ああ、三味線の音色<sup>ねいろ</sup>。何<sup>な</sup>という果敢<sup>はかな</sup>い、消えも入りた  
き哀れを催させるのであろう。かつてそれほどに、まだ自己を知

らなかつた得意の時分に、先生は長たらしい小説を書いて、その一節に三味線と西洋音楽の比較論などを試みた事を思返す。世の中には古社寺保存の名目こしゃじの下に、古社寺の建築を修繕するのではなく、かえつてこれを破壊もしくは俗化する山師があるように、邦楽の改良進歩を企てて、かえつて邦楽の真生命を殺してしまう熱心家のある事を考え出す。しかし先生はもうそれらをば余儀ない事であると諦めた。こんな事をいつて三味線の議論をする事が、已に三味線のためにはこの上もない侮辱ぶじよくなのである。江戸音曲えどおんぎよの江戸音曲たる所以ゆえんは時勢のために見る影なく踏みにじられて行く所にある。時勢と共に進歩して行く事の出来ない所にある。然しかも一思ひとおもいに潔いさぎよく殺され滅されてしまうのではなく、新時代の

色々な野心家の汚らしい手にいじくり廻されて、散々慰まれ辱し  
 められた揚句、あげく 鬪り殺しになぶ されてしまいたまう傷しい運命。それから生  
 ずる無限の哀傷が、即ち江戸音曲の真生命である。少くともそれ  
 は二十世紀の今こんにち 日洋服を着て葉巻を吸いながら聞くわれわれの  
 心に響くべき三味線のつぶや 眩きである。さればこれを改良するという  
 のも、あるいはこれを撲滅するというのも、いずれにしても滅び  
 行く三味線の身を取つては同じであるといわねばならぬ。珍々先  
 生が帝国劇場において『金毛狐』きんもうこ の如き新曲を聴く事を辞さな  
 いのは、つまり灰の中から宝石をさがした 捜出すように、新しきもの  
 処々にまだそのまま残されている昔のままの節ふしづけ 附を拾出す果敢  
 い楽しさのためである。同時に擬古派の歌舞伎座において、大おおき

薩摩つまを聞く事を喜ぶのは、古きものの中にも知らず知らず浸み  
 込んだ新しい病毒に、遠からず古きもの全体が腐つて倒れてしま  
 いそうな、その遺瀨やるせない無常の真理を悟り得るがためである。思  
 えばかえつて不思議にも、今日という今日まで生残つた江戸音曲  
 の哀愁をば、先生はあたかも廓くるわを抜け出で、唯一ただ人闇の夜道を跣は  
 足だしのままにかけて行く女のようにだと思つている。たよりの恋人に  
 出逢つた処で、未永く添い遂げられるというではない。互に手を  
 取つて南無阿弥陀仏と死ぬばかり。もし駕籠かごかきの悪者に出逢つ  
 たら、庚申塚こうしんづかの藪やぶかげに思うさま弄ばれた揚句、生命いのちあらばま  
 た遠国えんごくへ売り飛ばされるにきまつている。追手おつてに捕つかまつて元の  
 曲輪くるわへ送り戻されれば、煙管キセルの折檻せつかんに、またしても毎夜の憂き

つとめ。死ぬといい消えるというが、この世の中にこの女の望み得べき幸福の絶頂なのである。と思えば先生の耳には本調子も二<sup>に</sup>上りも三<sup>さん</sup>下りも皆この世は夢じや諦めしやんせ諦めしやんせと<sup>あが</sup>響くのである。されば隣りで唄<sup>うた</sup>う歌の文句の「夢とおもひて清<sup>せい</sup>心は。」といい「頼むは弥陀の御<sup>お</sup>ン誓ひ、南無阿弥陀仏々々々々々々々。」というあたりの節廻しや三味線の手に至つては、江戸音曲中の仏教的思想の音楽的表現が、その芸術的価値においてまさに楽劇『パルシワール』中の例えば「聖金曜日」のモチイブなぞにも比較し得べきもののように思われるのであった。

## 四



諦めるにつけ悟るにつけ、さすがはまだ凡夫ほんぷの身の悲しさに、  
 珍々先生は昨日きのうと過ぎし青春の夢を思うともなく思い返す。ふと  
 したことから、こうして困かこつて置くお妾めかけの身の上や、馴なれそ初めのむ  
 かしを繰返して考える。お妾は無論芸者であつた。仲なかのちよう之町で一  
 時ちじは鳴ならした腕。芸には達者な代り、全くの無筆むひつである。稽古本けいこほん  
 で見馴れた仮名より外には何にも読めない明盲目である。この  
 社会の人の持つている諸有あらずる迷信と僻見へきけんと虚偽と不健康とを一  
 つ残らず遺傳的に譲り受けている。お召めしの縞柄しまがらを論ずるには委くわ  
 しいけれど、電車に乗って新しい都会を一人歩きする事などは今  
 だに出来ない。つまり明治の新しい女子教育とは全く無関係な女

なのである。稽古唄の文句によつて、親の許さぬ色恋は悪い事である  
 と知つていたので、初恋の若旦那とは生木なまきを割く辛い目つらを見  
 せられても、ただその当座泣いて暮して、そして自暴酒やげざけを飲む事  
 を覚えた位のもの、別に天も怨うらまず人をも怨まず、やがて周囲か  
 ら強しいられるがままに、厭いやな男にも我慢して身をまかした。いやな  
 男への屈従からは忽たちまち間夫まぶという秘密の快樂を覚えた。多くの  
 人もてあそびものの玩弄物になると同時に、多くの人を弄んで、浮きつ沈みつ  
 定めなき不徳と淫蕩いんとうの生涯の、その果はてがこの河添いの妾宅に余  
 生を送る事になつたのである。深川ふかがわの湿地に生れて吉原よしわらの水  
 に育つたので、顔の色は生れつき浅黒い。一度髪かみの毛がすっかり  
 抜けた事があるそうだ。酒を飲み過ぎて血を吐いた事があるそう

だ。それから身体からだが生れ代つたように丈夫になつて、中ちゆう音おんの  
 音のど声こゝろに意気な錆さびが出来た。時々頭が痛むといつては顛顛こめかみへ即そつこ  
 功うし紙しを張つてゐるもの。今では滅多に風邪かぜを引くこともない。  
 突然お腹なかへ差込みさしこが来るなどと大騒ぎをするかと思つと、納豆なつとう  
 にお茶漬を三杯もかき込んで平然としている。お参りに出かける  
 外ほか、芝居へも寄席よせへも一向いっこうに行きたがらない。朝寝が好きで、  
 髪を直すに時間を惜しまず、男を相手に卑陋びろうな冗談をいつて夜ふ  
 かしをするのが好きであるが、その割には世帯持しよたいもちがよく、借金  
 のいい訳がなかなか巧うまい。年は二十五、六、この社会の女にしか  
 見られないその浅黒い顔の色の、妙すべに滑つこく磨き込まれている  
 様子は、丁度多くの人手にかかつて丁寧ていねいに拭き込まれた桐の手あ

ぶりの光沢つやに等しく、いつも重まぶたそうな瞼の下に、夢を見ているよ  
うなその眼色めいろには、照りもせず曇りも果てぬ晩春の空のいい知れ  
ぬ沈滞の味が宿っている——とでもいいいたい位に先生は思ってい  
るのである。実際今の世の中に、この珍々先生ほど芸者の好きな  
人、賤業婦の病的美に対して賞讃の声を惜しまない人は恐らくあ  
るまい。彼は何なに故ゆえに賤業婦を愛するかという理由みづかを自ら解釈し  
て、道德的及び芸術的の二条に分つた。道德的にはかつて『見果みは  
てぬ夢』という短篇小説中にも書いた通り、特種の時代とその制  
度もとの下に発生した花柳界全体は、最初から明あから白さまに虚偽を標榜  
しているだけに、その中うちにはかえつて虚偽ならざるもののある事  
を嬉しく思うのであった。つまり正当なる社会の偽善を憎む精神

の変調が、幾多の無理な訓練修養の結果によつて、かかる不正暗  
 黒の方面に一条の血路を開いて、茲こゝに僅なる満足を得ようとした  
 ものを見て、差さしつかえ支つかない。あるいはまたあまりに枯淡なる典型に  
 陥り過ぎてかえつて真情の潤うるおいに乏しくなつた古来の道徳に対す  
 る反感から、わざと悪徳不正を迎えて一時の快かいさい哉さいを呼ぶものと  
 も見られる。要するに厭世的なるかかる詭き弁べん的てき精神の傾向は破  
 壊的なるロマンチズムの主張から生じた一種の病弊である事は、  
 彼自身もよく承知しているのである。承知していながら、決して  
 改かいしゆん悛ゆんする必要がないと思うほど、この病弊を芸術的に崇拜し  
 ているのである。されば賤業婦の美を論ずるには、極端に流れた  
 る近世の芸術観を以てするより外はない。理性にも同情にも訴う

るのでなく、唯<sup>ただ</sup>過敏なる感覺をのみ基礎として近世の極端なる芸術を鑑賞し得ない人は、彼からいえば到底縁なき衆<sup>しゅじょう</sup>生<sup>せい</sup>であるのだ。女の嫌いな人に強<sup>しい</sup>て女の美を説き教える必要はない。酒に害あるはいわずと知れた話である。然<sup>しか</sup>もその害毒を恐れざる多少の覺悟と勇氣とがあつて、初めて酒の徳を知り得るのである。伝<sup>き</sup>くなら  
 聞く北米合衆国においては亞米利加印<sup>アメリカインデア</sup>甸人<sup>ン</sup>に対して絶對に火<sup>ウイス</sup>  
 酒<sup>キー</sup>を売る事を禁ずるは、印甸人の一<sup>ひとたび</sup>度<sup>たび</sup>醉<sup>たい</sup>えば忽<sup>たちま</sup>ち狂暴なる野  
 獸と變ずるがためである。印甸人の神經は淺酌微醉の文明的訓練なきがためである。修養されたる感覺の快樂を知らざる原始的健全なる某帝国の社会においては、婦人の裸体画を以て直<sup>ただち</sup>に国民の風俗を壞乱するものと認めた。南阿弗利加<sup>アフリカ</sup>の黒奴<sup>こくど</sup>は獸<sup>けもの</sup>の如く口を

開いて 哄こう笑しょうする事を知っているが、声もなく言葉にも出さぬ  
 美しい 微笑ほほえみによつて、いうにいわれぬ複雑な内心の感情を表白  
 する術じゆつを知らないそうである。健全なる某帝国の法律が恋愛と婦  
 人に関する一切の芸術をポルノグラフィイと見なすのも思えば無  
 理もない次第である——議論が思わず 岐わき路みちへそれた——妾宅の  
 主人たる珍々先生はかくの如くに社会の輿論よろんの極端にも嚴格枯淡  
 偏狭単一なるに反して、これはまた極端に、凡そ売色という一切  
 の行動には何ともいえない悲壯の神秘が潜ひそんでいると断言してい  
 るのである。冬の闇夜やみよに悪病を負う辻つじ君ぎみが人を呼ぶ声いたまの傷いたしさ  
 は、直ちにこれ、罪障深き人類の止やみがたき真正まことの嘆きではある  
 まいか。仏蘭西フランスの詩人 Marcel 《マルセル》 Schwob 《シュオツブ》

はわれわれが悲しみの淵に沈んでいる瞬間にのみ、唯の一夜、唯の一度われわれの目の前に現われて来るといふ辻君。二度巡り会おうとしても最<sup>も</sup>う会う事の出来ないといふ神秘なる辻君の事を書いた。「あの女たちはいつまでもわれわれの傍<sup>そば</sup>にいるものではない。あまりに悲しい身の上の恥かしく、長く留<sup>とどま</sup>っているに堪えられないからである。あの女たちはわれわれが涙に暮れているのを見ればこそ、面と向つてわれわれの顔を見上げる勇氣があるのだ。われわれはあの女たちを哀れと思う時にのみ、彼<sup>かのおんな</sup>女たちを了解し得るのだ。」といっている。近松の、心中<sup>しんじゆうもの</sup>物を見ても分るではないか。傾<sup>けいせい</sup>城の誠が金で面<sup>つら</sup>を張る压制な大<sup>だいじん</sup>尽に解釈されようはずはない。変る夜ごとの枕に泣く売春婦の誠の心の悲



しみは、親の慈悲妻の情を仇なさけにしたその罪の恐しさに泣く放蕩児の身の上になつて、初めて知り得るのである。「傾城に誠あるほど買ひもせず」と川柳子せんりゆうしも已に名句を吐いている。珍々先生は生れ付きの旋毛曲つむじまがり、親に見放され、学校は追出され、その後は白浪物しらなみものの主人公のような心持になつてとにかく強いもの、えばるものが大嫌いであつたから、自然と巧たくまずして若い時分から売春婦には惚ほれられがちであつた。しかしこういう業ごうつくばりの男の事故ことゆえ、芸者が好きだといつても、当時新橋第一流の名花と世に持もて囃はやされる名古屋種なごやだねの美人なぞに目をくれるのではない。深川の堀割の夜深よふけ、石置場のかげから這出はいだす辻君にも等しい彼のか水みづ転てんの身の浅間あさましさを愛するのである。悪病をつつむ腐くさりし肉

の上に、爛ただれたその心の悲しみを休ませるのである。されば河添  
 いの妾宅にいる先生のお妾も要するに世間並の眼を以て見れば、  
 少しばかり甲羅こうらを経たるこの種類の安物たるに過ぎないのである。

## 五

隣りの稽古けいこうた唄はまだ止やまぬ。お妾は大分化粧に念が入いつてい  
 ると見えてまだ帰らない。先生は昔の事を考えながら、夕飯ゆうめしどき時  
 の空腹くうふくをまぎらすためか、火の消えかかった置炬燵おきこたつに頬杖ほおづえ  
 をつき口から出まかせに、

「変り行く末の世ながら「いにしへ」を、「いま」に忍ぶの恋こ

草いぐさや、誰れに摘めとか繰返し、うたふ隣のけいこ唄、宵はまち

そして恨みて暁と、聞く身につらきいもがりは、同じ待つ間  
 の置炬燵、川風寒き櫺れんじまど子窓、急ぐ足音ききつけて、かけた  
 蒲団の格子こうしそと外、もしやそれかとのぞいて見れば、河岸かしの夕  
 日にしよんぼりと、枯れた柳の影ばかり。

まだ帰つて来ぬ。先生はもう一ツ、胸にあまる日頃の思いをお  
 なじ置炬燵にことよせて、

春しゆんすい水が手錠はめられ海老蔵えびぞうは、お江戸かまひの「むかし」  
 なら、わしも定めし島流しすずり、硯すずりの海の波風に、命の筆みなれの水  
 馴竿ざお、折れてたよりも荒磯の、道理引つ込む無理の世は、

今もむかしの夢のあと、たづねて見やれ思ひ寝の、手たまくら枕寒

## し置炬燵。

とやらかした。小走りの下駄の音。がらりと今度こそ格子が明いた。お妾は抜衣紋にした襟頸ばかり驚くほど真白に塗りたて、浅黒い顔をば拭き込んだ煤竹のようにひからせ、銀杏返しの両鬢へ毛筋棒を挿込んだままで、直ぐと長火鉢の向うに据えた朱の溜塗の鏡台の前に坐つた。カチリと電燈を捻じる響と共に、黄いろ光が唐紙の隙間にさす。先生はそのそ置炬燵から次の間へ這出して有合う長煙管で二、三服煙草を吸いつつ、余念もなくお妾の化粧する様子を眺めた。先生は女が髪を直す時の千姿万態をば、そのあらゆる場合を通じて尽くこれを秩序的に諳しながら、なお飽きないほどの熱心なる観察者である。まず、忍

び逢いの小座敷には、はねかえ 刎返した重い夜具へ背をよせかけるよう  
 に、そしてたてひざ 立膝したながしゆばん 長襦袢の膝の上か、あるいはまたふなぞこ 船底  
まくら 枕の横腹に懐中鏡を立掛けて、かかる場合に用意するつげ 黄楊の小  
ぐし 櫛を取つて先ず二、三度、枕のとがなるびん 鬢の後おくれげ 毛を搔き上げた  
のち 後は、ねじ 捻るようにぜんしん 前身をそらして、櫛の背を齒にくわ 銜え、両手を  
 高く、長襦袢の袖そでぐち 口はこの時下へと滑つてその二の腕の奥にも  
 し入いれぼくろ 黒子あらば見えもやすむと思われるまで、りようひじ 両 肱 を菱の  
 字なりに張出してうしろ 後のたば 鬢を直し、さてまた最後には宛ら糸瓜の取  
つて 手でも摘むがように、二本の指先で前髪たば の束め ね目を軽く持ち上げ、  
 片手の櫛で前髪たば のふくらみをはえぎわ 生際わ の下から上へと迅速に搔き上  
 げる。たぼど 鬢留めの一、二本はいつも口に銜えているものの、女はこ

の長々しい熱心な手芸の間、黙つてぼんやり男を退屈さして置くものでは決してない。またの逢瀬の約束やら、これから外の座敷へ行く辛さやら、とにかく寸鉄人を殺すべき片言隻語は、かえつて自在に有力に、この忙しい手芸の間に乱発されやすいのである。先生は芝居の棧敷にいる最中といえども、女が折々思出したように顔を斜めに浮かして、丁度仏画の人物の如く綺麗にそろえた指の平で絶えず鬢の形を気にする有様をも見逃さない。さればいよいよ湯上りの両肌脱ぎ、家が潰れようが地面が裂けようが、われ関せず焉という有様、身も魂も打込んで鏡に向う姿に至つては、先生は全くこれこそ、日本の女の最も女らしい形容を示す時であると思うのである。幾世紀の洗練を経たる Alexandrin

『アレキサンドリン』 十二音の詩句を以て、自在にミュッセを  
 してパリイむすめ巴里娘の踊の裾すそを歌わしめよ。われにはまた来歴ある一いち  
 中ゆうぶし節の『黒髪』がある。黄楊つげの小櫛おぐしという単語さえもがわれ  
 われの情じょうしよ緒を動かすにどれだけ強い力があるか。其処そこへ行く  
 と哀れや、色さまざまのリボン美しといえども、ダイヤモンド入  
 りのハイカラ櫛立派なりといえども、それらの物の形と物の色よ  
 りして、新時代の女子の生活が芸術的幻想を誘起し得るまでには、  
 まだまだ多くの年ねんげつ月を経た後のちでなければならぬ。新時代の芸術  
 の力をもつともつと沢山に借りた揚句あげくの果でなければならぬ。然しか  
 るに已に完成しおわった江戸芸術によつて、溢あふるるまでその内容  
 の生命を豊富にされたかかる下町の女の立居たちいふるま振舞いには、敢あえて化

粧の時の姿に限らない。春雨はるさめの格子戸こうしどに洩蛇しづじやの目開めひらきかける様

子といい、長火鉢の向うに長煙管取り上げる手付きといい、物思  
う夕まぐれ襟えりに埋める頤おとがいといい、さては唯風ただに吹かれる髪の毛の  
一筋、そら解どけの帯の端はしにさえ、いうばかりなき風情ふせいが生ずる。

「ふぜい」とは何ぞ。芸術的洗練を経たる空想家の心にのみ味わ  
るべき、言語にいい現し得ぬ複雑豊富なる美感の満足ではないか。  
しかもそれは軽く淡く快き半音さが下つた mineur 《ミノウル》の調

子のものである。珍々先生は芸者上りのお妾の夕化粧をば、つま  
り生きて物いう浮世絵と見て楽しんでるのである。明治の女子  
教育と関係なき賤業婦の淫靡いんぴなる生活によつて、爛熟した過去の  
文明の遠い唄うたきを聞きこうとしてるのである。この僅かなる慰安



が珍々先生をして、洋服を着ないでもすむ半日を、唯うつうつとこの妾宅に送らせる理由である。已に「妾宅」というこの文字が、もう何となく廃滅の気味を帯びさせる上に、もしこれを雑誌などに出したなら、定めし文芸すなわち即悪徳と思込んでいる老人たちが例の物議を起す事であろうと思うと、なお更に先生は嬉しくて堪たまらないのである。

## 六

お妾のお化粧がすむ頃には、丁度下女がお釜かまの火を引いて、膳ぜん立んだての準備をはじめ。この妾宅には珍々先生一流の趣味によつ

て、食事の折には一切、新時代の料理屋または小待合こまちあいの座敷を聯想れんそうさせるような、上等ならば紫檀したん、安ものならばニス塗の食卓を用いる事を許さないので、長火鉢の向うへ持出されるのは、古びて剥はげてはいれど、やや大形の猫足ねこあしの塗膳であった。先生は最初感情の動くがままに小説を書いて出版するや否や、忽ち内務省からは風俗壊乱、発売禁止、本屋からは損害賠償の手詰てづめの談判、さて文壇からは引続き歡樂に哀傷に、放蕩に追憶と、身に引受けた看板の瑕きずに等しき悪名あくみやうが、今はもつけの幸さいわいに、高等遊民不良少年をお顧客とくいの文芸雑誌で飯を喰う売文やっこの奴とまで成り下さがつてしまったが、さすがに筋目正しい血筋の昔を忘れぬためか、あるいはまた、あらゆる芸術の放胆自由の限りを欲する中なかにも、

自然と備<sup>そなわ</sup>る貴族的なる形の端麗、古典的なる線の明晰を望む先生  
 一流の芸術的主張が、知らず知らず些<sup>ささい</sup>細なる常<sup>じょう</sup>住<sup>じゅう</sup>坐<sup>ざ</sup>臥<sup>が</sup>の間に  
 現われるためであろうか。（そは作者の知る処に非<sup>あ</sup>らず。）とにか  
 く珍々先生は食事の膳につく前には必ず衣紋<sup>えもん</sup>を正し角帯<sup>かくおび</sup>のゆる  
 みを締<sup>しめ</sup>直<sup>なお</sup>し、縁側<sup>えんがわ</sup>に出て手を清めてから、折々窮屈<sup>きゆうくつ</sup>そうに膝  
 を崩す事はあつても、決して胡坐<sup>あぐら</sup>をかいたり毛脛<sup>けずね</sup>を出したりする  
 事はない。食事の時、仏蘭西人<sup>フランスじん</sup>が極<sup>きま</sup>つて Serviette 《セルヴィエツ  
 ト》<sup>おとがい</sup>を頤<sup>おとがい</sup>の下から涎<sup>よだれ</sup>かけ<sup>かけ</sup>掛<sup>かけ</sup>のように広げて掛けると同じく、先  
 生は必ず三<sup>み</sup>ツ折<sup>おり</sup>にした懐中の手拭を膝の上に置き、お妾がお酌す  
 さかずきひとな  
 る盃を一嘗<sup>おもむろ</sup>めしつ<sup>つ</sup>つ徐<sup>おもむろ</sup>に膳の上を眺める。  
 ちいさきたなら  
 小<sup>おけ</sup>な汚<sup>おけ</sup>しい桶のままに海鼠腸<sup>このわた</sup>が載っている。小皿の上に三片<sup>みきれ</sup>ば

かり赤味がかつた松脂まつやに見たようなものがあるのはからすみである。千せ  
 住んじゆの名産寒鮎かんぶなの雀焼くしやきに川海老かわえびの串焼いまだと今戸名物の甘い甘い  
 柚味ゆずみそ噌ちやづけは、お茶漬ちやづけの時お妾だいこうぶつが大好物のなくてはならぬ品物で  
 ある。先生は汚らしい桶ふたの蓋ふたを静に取つて、下痢げりした人糞ふたのよう  
 な色を呈した海鼠なまこの腸はらわたをば、杉箸すぎばしの先ですくい上げると長く糸  
 のようにつながつて、なかなか切れないのを、氣長いくたびに幾度いくたびとな  
 くすくつては落し、落してはまたすくい上げて、丁度好加減いいかげんの  
 長さになるのを待つて、傍かたわらの小皿に移し、再び丁寧ていねいに蓋をした後、  
 やや暫くの間は口をも付けずに唯恍惚ただとして荒海の磯臭かおい薫りを  
 のみかいでいた。先生は海鼠腸このわたのこの匂におとい色いろといいまたその  
 汚すべしい桶かといい、凡すべて何らの修飾しゆしをも調理ちゆりをも出来得るかぎりの

人為的技巧を加味せざる（少くとも表示せざる）天然野生の粗暴が陶器漆器しっきなどの食器に盛もれてゐる料理の真中に出しやばつて、茲こゝに何ともいえない大胆な意外な不調和を見せてゐる処に、いわゆる雅致となえと称る極めてパラドックサルな美感の満足を感じて止まなかつたからである。由来この種の雅致は或一派の愛国主義者をして断言せしむれば、日本人独特固有の趣味とまで解釈されてゐる位で、室内裝飾の一例を以てしても、床柱とこばしらには必ず皮のついたままの天然木てんねんぼくを用いたり花を活いけるに切り放した青竹つっの筒を以てするなどは、なるほどRococo《ロココ》式にもEmpire《アンピール》式にもないようである。しかしこの議論はいつも或る条件をつけて或程度に押留おしとどめて置かなければならぬ。あ

んまりお調子づいて、この論法一点張りで東西文明の比較論を進めて行くと、些細な特種の実例を上げる必要なくいわゆる Maiso Ⅱ《メイゾン》de 《ド》 Papier 《パピエー》（紙の家）に住んで

畳の上に夏は昆虫類と同棲する日本の生活全体が、何よりの雅致になつてしまふからである。珍々先生はこんな事を考えるのでもなく考えながら、多年の食道楽くいでんらくのために病的過敏となつた舌の先で、苦味にがいとも辛からいとも酸すっぱいとも、到底ひとこと一言ではいい現し方のないこの奇妙な食物の味あじわいを吟味して楽しむにつけ、国の東西時の古今を論ぜず文明の極致に沈ちんめん湎した人間は、是非にもこういう食物を愛好するようになってしまわなければならぬ。芸術は遂に国家と相容れざるに至つて初めて尊たつとく、食物は衛生と背はいれい戻す

るに及んで真あじわいの味を生ずるのだ。けれども其処まで進もうという  
 には、妻あり子あり金あり位ある普通人には到底薄気味わるくて  
 出来るものではない。そこで自然おのずと、物には専門家くろうとと素人しろうとの差  
 別が生ずるのだと、珍々先生は自己の廃趣味に絶対の芸術的価  
 値と威信とを附与して、聊いささか得意の感をなし、荒すざみきつた生涯の、  
 せめてもの慰なぐさめ藉せきにしようとして試みるのであったが、しかし何とな  
 くその身の行末そらおそろ空恐そらおそろしく、ああ人間もこうなつてはもうおし  
 まいだ。滋養に富んだ牛肉とお行儀のいい鯛の塩焼を美味のかぎ  
 りと思つている健全な朴ほくとつ訥な無邪気な人たちは幸福だ。自分も  
 最もう一度そういう程度まで立戻る事が出来たとしたら、どんなに  
 万々歳めでたなお目出度めでたかりける次第であろう……。

惆悵ちゆうちようとして盃さかずき

を傾くる事二度び三度び。唯見ればお妾は新しい手拭をば撫付け  
 たばかりの髪の上にかけて、下女まかせにはして置けない白魚か  
 何かの料理を拵えるため台所の板の間に膝をついて頻に七輪の  
 下をば洩団扇であおいでいる。

## 七

何たる物哀れな美しい姿であろう。夕化粧の襟足際立つ手拭の  
 冠り方、襟付の小袖、肩から滑り落ちそうなお召の半纏、お召  
 の前掛、しどけなく引掛に結んだ昼夜帯、凡て現代の道德家  
 をしては覚えぬ眉を顰めしめ、警察官をしては坐に嫌疑の眼を鋭



くさせるような国貞くにさだ振りの年増としま盛りが、まめまめしく台所に  
 働いている姿は勝手口の破れた水障子、引窓の綱、七輪しちりん、水みずが  
 瓶め、竈かまど、その傍そばの煤すすけた柱に貼はつた荒神こうじん様のお札ふだなぞ、一体  
 に汚らしく乱雑に見える周囲の道具どうぐ立と相俟あいまつて、草双紙くさごうしに  
 見るような何はかという果敢はかない佗住居わびずまいの情調、また哥沢うたざわの節廻し  
 に唄い古されたような、何なかという三絃さんげん的情調を示すのであろう。  
 先生はお妾めかけが食事の仕度をしてくれる時のみではない。長火鉢の  
 傍そばにしよんぼりと坐よつて汚れた壁の上にその影を映させつつ、物  
 静に男の着物を縫ぬっている時、あるいはまた夜よるの寢床ねどに先ず男を  
 寝かした後のち、その身は静に男の羽織着物を畳たたんで角帯かくおびをその上  
 に載せ、枕まくら頭かぶの煙草盆たばこの火をしらべ、行燈あんどうの燈心とうしんを少し

く引込め、引廻した屏風の端を引直してから、初めて片膝を蒲団の上に載せるように枕頭に坐つて、先ず一服した後の煙管を男に出してやる——そういう時々先生はお妾に対して口には出さない無限の哀傷と無限の感謝を覚えるのである。無限の哀傷は恐ろしい専制時代の女子教育の感化が遺傳的に下町の無教育な女の身に伝つている事を知るがためである。無限の感謝は新時代の企てた女子教育の効果が、専制時代のそれに比して、徳育的にも智育的にも実用的にも審美的にも一つとして見るべきもののない実例となし得るがためである。無筆のお妾は瓦斯ストーヴも、エプロンも、西洋綴の料理案内という書物も、凡て下手の道具立なくして、巧に甘いものを作る。それと共に四季折々の時候に従つ

て俳諧的詩趣を覚えさせる野菜魚介の撰択に通曉している。それにもかかわらず私はもともと賤しい家業をした身体からだですからと、万事に謙讓であつて、いかほど家庭をよく修め男に満足と幸福を与えたからとて、露ほどもそれを己れの功としてこれ見よがしに誇る心がない。今いま時ときの女学校出身の誰々さんのように、夫の留守に新聞雑誌記者の訪問をこれ幸い、有難からぬ御面相の写真まで取出して「わらわの家庭」談などおっぱじめるような事は決してない。かく口汚く罵るものの先生は何も新しい女権主義フェミニズムを根本から否定しているためではない。婦人参政権の問題なぞもむしろ当然の事としている位である。しかし人間は総じて男女の別なく、いかほど正しい当然な事でも、それをば正当なりと自分からは主

張せずに出しやばらずに、何処までも遠慮深くおとなしくしている方がかえつて奥床おくゆかしく美しくはあるまいか。現代の新婦人連は大方これに答えて、「そんなお人ひとよし好な態度を取つていたなら増々ますます権利を蹂躪じゆうりんされて、遂には浮瀬うかむせがなくなる。」というかも知れぬ。もし浮瀬なく、強い者のために沈められ、滅ほろぼされてしまふものであつたならば、それはいわゆる月に村雲むらくも、花に嵐ふぜいの風情。弱きを滅す強き者の下賤げせんにして無礼野蛮なる事を証明すると共に、滅される弱き者のいかほど上品で美麗であるかを証明するのみである。自己を下賤醜悪にしてまで存在を続けて行く必要が何処にあらう。潔けいぎよく落花の雪となつて消きるに如しくはない。何に限らず正当なる権利を正当なりなぞと主張する如きは聞いた

ふうへりくつ 風な屁理窟を楯たてにするようで、実に 三二百代さんびやくだいいげんてき言的、新聞屋的、  
 田舎議員的ではないか。それよりか、身に覚えなき罪科つみとがも何の  
 明しの立てようなく哀れ刑場の露と消え……なんテいう方が、何  
 となく東洋的なる固有の残忍非道な思いをさせてかえつて痛快で  
 はないか。青山原宿あたりの見掛けばかり門構えの立派な貸家の  
 二階で、勸工場かんこうばしき式の椅子テーブルの小道具よろしく、女子大学  
 出身の細君が鼠色になったパクパクな足袋たびをはいて、夫の不品行  
 を責め罵るなぞはちよつと輸入的ノラらしくて面白いかも知れぬ  
 が、しかし見た処の外観からして如何にも真底しんそこからノラらしい  
 深みと強みを見せようというには、やはり髪かみの毛けを黄きいろく眼まなこを青く  
 して、成ろう事なら言葉も英語か独逸語ドイツゴでやった方がなお一層よ

さそうに思われる。そもそも日本の女の女らしい美点——歩行に  
 不便なる長い絹の衣服きものと、薄暗い紙張りの家屋と、母音ぼいんの多い緩  
 慢な言語と、それら凡すべてに調和して動かすことの出来ない日本的  
 女性の美は、動的ならずして静止的でなければならぬ。争つたり  
 主張したりするのではなくて苦しんだり悩んだりする哀れ果敢はかない  
 処にある。いかほど悲しい事つら辛い事があつても、それをば決して  
 彼のサラ・ベルナルの長台詞ながぜりふのようには弁じ立てず、薄暗い  
 行燈あんどうのかげに「今頃は半七はんしちさん」の節廻しそのまま、身をね  
 じらして黙つて鬱ふさび込むところにある。昔からいい古した通り海か  
いどう棠の雨に悩み柳の糸の風にもまれる風情ふせいは、単に日本の女性美  
 を説明するのみではあるまい。日本という庭園的の国土に生ずる

秩序なき、淡泊なる、可憐なる、疲労せる生活及び思想の、弱く果敢き凡ての詩趣を説明するものであろう。

## 八

然り、多年の厳しい制度の下もとにわれらの生活は遂に因襲的に活気なく、貧乏臭くだらしなく、頼りなく、間の抜けたものになったのである。その堪たえがたき裏うら淋さびしさと退屈たいくつさをまぎらすせめてもの手段は、不可能なる反抗でもなく、憤怒ふんぬ怨嗟えんさでもなく、ぐつとさばけて、諦あきらめてしまつて、そしてその平々凡々極まる無味単調なる生活のちよつとした処ところに、ちよつとした可笑おか味面白しみ味を

発見して、これを頓智的な極めて軽い芸術にして嘲あざけつたり笑つたりして戯れ遊たわむぶ事である。桜さく三味線の国は同じ専制国でありながら支那や土耳古トルコのように金と力がない故万代ばんだいふえき不易の宏大なる建築も出来ず、荒涼たる沙漠や原野がないために、孔子こうし、釈迦しゃか、キリストキリスト、基督などの考え出したような宗教も哲学もなく、また同じ暖い海はありながらどういふ訳か希臘ギリシヤのような芸術も作らずにしまつた。よし一つや二つ何か立派とびきなどつしりした物があつたにしても、古今に通じて世界第一無類飛切りとして誇るには足りないよ  
 うな気がする。然らば何をか最も無類飛切りとしようか。貧乏臭い間の抜けた生活のちよつとした処おかしみに可笑味面白味を見出して戯れ遊ぶ俳句、川柳、端唄はうた、小唄こばなしの如き種類の文学より外には求



めても求められまい。論より証拠、先ず試みに『詩経』を繙ひもといて  
 も、『唐詩選』、『三体詩』を開いても、わが俳句にある如き雨  
 漏りの天井、破やぶれ障しょうじ子、人馬鳥獸ふんの糞、便所、台所などに、純  
 芸術的な興味を托した作品は容易に見出されない。希臘ギリシヤ羅馬ローマ以  
 降たいせい泰西たいせいの文学は如何ほど熾さかんであつたにしても、いまだ一いち人にんと  
 して我が俳諧師其角きかく、一茶いつさの如くに、放屁のぐそや小便のぐそや野糞のぐそまでも詩  
 化するほどの大胆あえを敢てするものはなかつたようである。日常の  
 会話にも下しもがかつた事を軽い可笑味ユウモアとして取扱い得るのは日本文  
 明固有の特徴といわなければならぬ。この特徴を形造つた大天  
 才は、やはり凡すべての日本的固有の文明を創造した蟄居ちつきよの「江戸えど  
 人じん」である事は今更茲ここに論ずるまでもない。もし以上の如き珍々

先生の所論に対して不同意な人があるならば、請う試みに、旧習に従った極めて平凡なる日本人の住家じゅうかについて、先ずその便所なるものが縁側えんがわと座敷の障子、庭などと相俟あいまつて、如何なる審美的価値を有しているかを觀察せよ。母家おもやから別れたその小さな低い鱗葺こけらぶきの屋根といい、竹格子の窓といい、入口いりぐちの杉戸といい、殊に手を洗う縁先の水鉢みずばち、柄杓ひしやく、その傍そばには極つて葉蘭らんや石躑つわぶきなどを下草したくさにして、南天や紅梅の如き庭木が目隠しの柴垣うしろを後にして立つている有様、春あしたの朝には鶯がこの手水鉢ちようずばちの水を飲みに柄杓の柄えにとまる。夏の夕ゆうべには縁の下から大なる墓おおききが湿つた青苔あおこけの上にその腹を引摺ひきずりながら歩き出る。家の主人あるじが石菖せきしょうや金魚の水鉢を縁側に置いて楽しむのも大抵はこの手水

鉢の近くである。宿の妻が虫籠むくりんや風鈴ふうりんを吊つるすのもやはり便所の戸口近くである。草双紙の表紙や見返しみがしの意匠いせうなぞには、便所の戸と掛手拭かかてぬぐいと手水鉢てみずばちとが、如何に多く使用されているか分らない。かくの如く都会における家庭の幽雅なる方面、町中まちなかの住いの詩的情趣を、専ら便所もつばとその周囲の情景に仰おほいだのは実際日本ばかりであろう。西洋の家庭には何処どこに便所があるか決して分らぬようにしてある。習慣と道徳とを無視する如何に狂激なる仏蘭フランドル西フランスの画家といえども、まだ便所の詩趣を主題にしたものはないようである。そこへ行くと、江戸の浮世絵師は便所と女とを配合して、巧みなる冒険に成功しているのではないか。細帯しどけなき寝衣姿ねまきすがたの女が、懐紙かひしを口くちに銜くわえて、例なまめの艶あまかしい立膝たてひざながらに

手水鉢の柄杓から水を汲んで手先を洗っていると、その傍そばに置いた寝屋ねやの雪洞ぼんぼりの光は、この流派つねの常として極端に陰影の度を誇張した区劃くわいの中に夜よるの小雨こさめのいと蕭条しめやかに海棠かいどうの花弁はなびらを散す小庭こていの風情ふうせいを見せている等は、誰でも知っている、誰でも喜ぶ、誰でも誘いざなわれずにはいられぬ微妙な無声の詩ではないか。敢えて絵空事えそらごとなんぞと言う勿なかれ。とかくに芝居を芝居、画えを画とのみして、それらの芸術的情趣は非常な奢侈しゃしぜいたく贅あたら沢えに非あらざれば決して日常生活中には味われぬもののように独断している人たちは、容易しゆこうに首肯しんげんしないかも知れないが、便所によつて下町風な女姿が一層の嬌きょう艶えんを添え得る事は、何も豊国とよくにや国貞くにさだの錦絵にしきえばかりには限らない。虚言うそと思うなら目にも三坪わびずまいの佗住居い。珍々

先生は現にその妾宅においてそのお妾によつて、實地に安上りにこれを味つてござるのである。

## 九

今の世は唯たださえ文学美術をその弊害からのみ觀察して宛さなら十悪七罪の一ツの如く厭いとい恐れている時、ここに日常の生活に芸術味を加えて生存の楽しさを深くせよといわば、それこそ世を害し国を危くするものと老人連はびつくりするであらう。尤も国民的もつとなる大芸術を興おこすには個人も国家もそれ相当に金と力と時間の犠牲を払わなければならぬ。万が一しくじつた場合には損害ばかりが

残つて危険かも知れぬ。日本のような貧乏な国ではいかに思想上  
 価値があるからとてもしワグナアの如き楽劇一曲をやや完全に演  
 ぜんなぞと思<sup>おもいた</sup>立たば米や塩にまで重税を課して人民どもに塗炭<sup>とたん</sup>  
 の苦しみをさせねばならぬような事が起るかも知れぬ。しかしそ  
 れはまずそれとして何もそんなに心配せずとも或種類の芸術に至  
 つては決して二宮尊徳<sup>にのみやそんとく</sup>の教と<sup>ていしよく</sup>触<sup>ふ</sup>しないで済むものが許<sup>い</sup>  
 多<sup>くら</sup>もある。日本の御老人連は英吉利<sup>イギリス</sup>の事とさえいえば何でもすぐ  
 に安心して喜ぶから丁度よい。健全なるジョン・ラスキンが理想  
 の流れを汲んだ近世裝飾美術の改革者ウイリアム・モオリスとい  
 う英吉利人の事を言おう。モオリスは現代の裝飾及<sup>および</sup>工芸美術の墮  
 落に対して常に、趣味〔Gout〕と贅沢 Luxe とを混同し、また

美 [Beaute'] の富貴 Richesse を同一視せざらん事を説き、趣味を以て贅沢に代えよと叫んでいる。モオリスはその主義として芸術の専門的偏狭を憎みあくまでその一般的鑑賞と実用とを欲したために、時にはかえつて極端過激なる議論をしているが、しかしその言う処は敢て英国のみならず、殊にわが日本の社会なぞに對してはこの上もない教訓として聽かれべきものが<sup>すくな</sup>尠くない。一例を挙げれば、現代一般の芸術に興味なき点は金持も貧乏人もつまりは同じであるという事から、モオリスは世のいわゆる高尚優美なる紳士にして伊太利亞、<sup>イタリヤ</sup>埃及等<sup>エジプト</sup>を旅行して古代の文明に對する造詣<sup>ぞうけい</sup>深く、古美術の話とさえいえば人に劣らぬ熱心家でありながら、平然として何の氣にする処もなく、<sup>うけおいぶしん</sup>請負普請の醜劣

俗悪な居室きよしつの中に住なかんでいる人があると慨嘆している。これは知識ある階級の人すら家具及び家内装飾等の日常芸術に對して、一向に無頓着である事を痛罵つうばしたものである。わが日本の社会においててもまた同様。書画骨董と稱する古美術品の優秀清雅と、それを愛好するとか稱する現代紳士富豪の思想及生活とを比較すれば、誰れか唾然あぜんたらざるを得んや。しかして茲ここに更に一層唾然たらざるを得ざるは新しき芸術新しき文学を唱となうる若き近世人の立た居ち振舞ふるまいであろう。彼らは口に伊太利亜復興期の美術を論じ、仏国近世の抒情詩を云々うんぬんして、芸術即ち生活、生活即ち美とまでいい做なしながらその言行の一致せざる事むしろ憐むべきものがある。看みよ。彼らは己れの容貌と体格とに調和すべき日常の衣服の



品質しまがら縞柄さえ、満足には撰択し得ないではないか。或者は代だいが言人んにんの玄関番の如く、或者は齒医者おちぶれの零落の如く、或者は非番巡查の如く、また或者は浪花節なにわぶし語りの如く、壮士役者の馬の足の如く、その外見は千差万様なれども、その禪ふんどしの汚さ加減はいずれもさぞやと察せられるものばかりである。彼らはまた己れが思想の伴侶たるべき机上の文房具に対しても何らの興味も愛好心もなく、卑俗の商人が売うりさば捌く非美術的の意匠を以て、更に意とする処がない。彼らは単に己れの居室を不潔乱雑にしている位ならまだしもの事である。公衆のために設けられたる料理屋の座敷あがに上つては、掛物と称する絵画と置物と称する彫刻品を置いた床とこの間に、泥だらけの外がいとう套を投げ出し、掃き清めたる小庭に巻煙

草の吸殻を捨て、畳の上に焼け焦しをなし、火鉢の灰に啖を吐く  
なぞ、一挙一動いささかも居室、家具、食器、庭園等の美術に対  
して、尊敬の意も愛惜の念も何にもない。軍人か土方の親方なら  
ばそれでも差支はなからうが、いやしくも美と調和を口にす  
る画家文士にして、かくの如き粗暴なる生活をなしつつ、毫も己  
れの芸術的良心に恥る事なきは、実にや怪しともまた怪しき限り  
である。さればこれらの心なき芸術家によりて新に興さるる新し  
き文学、新しき劇、新しき絵画、新しき音楽が如何にも皮相的に  
して精神気魄に乏しきはむしろ当然の話である。当節の文学雑誌  
の紙質の粗悪に植字の誤り多く、体裁の卑俗な事も、単に経済  
的事情のためとのみはいわれまい……。

あだしごとはきておきつ  
閑話休題。

妾宅の台所にてはお妾が心づくしの手料理  
白魚の雲丹焼うにやきが出来上り、それからお取り膳ぜんの差しつ押えつ、ま  
ことにお浦山吹うらやまぶきの一いち場じょうは、次の巻まきの出づるを待ち給えと  
いいたいところであるが、故あつてこの後あとは書かず。読者りよう諒せよ。

明治四十五年四月



# 青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一～五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2010年11月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 妾宅

永井荷風

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>